

森 章司 教授を送る

森 章司先生は定年御退任まで二年を残し、本年三月末日をもって依願退職なされることになった。お送りする側の心境は、実に複雑である。なぜなら私事で恐縮だが、先生をお送りすると、着任後九十四年にしかならない私が、経歴上、本学科の最長老となってしまうからである。このことは、本学科の一員に加えていただいた時からある程度は予想できていたはずだが、いざ事態を目前にすると狼狽と寂寥感を禁じ得ない。

狼狽は、最も長い伝統を有する本学科の運営に、森先生のような豊富な知識と経験を私と同僚が持ち合わせていないことに起因し、寂寥感は、それに付随して、はやくに親をうしなつた子供の心に似たものである。

先生は、私が平成四年に本学科教員公募に応じたとき、第一部主任をなさっておられた。秋に行われた面接は、第二部主任の故里道徳雄先生に加えて専門分野の近い清水 乞先生（名誉教授）と三人で下さつたと記憶している。この時、実質的な質問は清水先生が担当され、私は手に汗を握りながら懸命に心えていた。面接の最後に、森先生がお顔をほころばせながらなされた質問に、私は一瞬啞然となり、同時に微かな安堵を覚えた。その質問とは「ところで橋本さん、お酒は好きですか」であった。「毎日、晩酌をしております」とお答えしたと思う。このお言葉に、私の顔は、おそらく極度の緊張に急な弛緩が生じてぎこちなく奇妙だったに違いない。

翌年四月から、ちようど十五歳の違いがあるものの最も年齢の近い森先生が、勤務後よく飲み誘つて下さつた。私が今利用している白山界隈の蕎麦屋や居酒屋の大半は、森先生のお誘いで憶えたものである。今から思うと、巧みな後輩指導であった。当時は木曜日の五時限目に第一部のゼミがあり、七時限目に第二部のゼミがあつて、六時

限目に夕食をとりながら毎週学科会議を行っていた。先生のお誘いは木曜以外の、お互いの授業が五、六時限で終わった曜日であった。酒席では全学の抱えている諸問題や学科運営、授業運営のことなど実に有益なお話を伺った。後日、先生に教わったことであるが、毎週の学科会議は、学科運営の民主化、すなわち僧伽の和合の具現化のために始められたとのことだった。当時、学科会議では新教育課程も盛んに議論されていた。着任一年目の夏季休暇の始め頃に、東大近くの安旅館で合宿して行われた学科会議も、この一環であった。老練なる六人（菅沼 晃名誉教授は、当時学長を務めておられたので不参加）の先輩先生方のなかで新参の私は、貢献できるような意見も出せず深酒をし、翌朝気分が悪かったのを憶えている。それだけ、森先生をはじめ先輩方の学科運営への熱心な取り組みに、私の体が驚いたということであろう。

森先生は、昭和六十三年から昨年度まで学科主任、大学院専攻主任、大学理事・評議員、学部長、研究所所長として大学運営に二十年余り取り組んでこられた。昭和五十二年に本学専任教員となられて今年で三十年経つから在任期間の三分の二は学科・大学運営に挺身してこられた訳である。私などは一年を除いて今年で連続六年主任を務めているが、学務の多さに普段の怠惰癖が加わって研究が疎かになりがちである。しかし、御業績一覧を見れば一目瞭然、どんなに繁多な期間であっても不断に御研究を公刊しておられる。学務の手早さは、若い頃のご経歴が功を奏しているのであろう。瘦身で愛飲なされながらも、先生のごご精力には感服の至りである。十年前の夏に中南インドの細かな佛跡調査に随行したが、獣道を先生は私よりも早く登り、丘中腹にある窟院の僧房を巻き尺で計測しておられた姿にも、研究への情熱から生ずる精力が感じられた。

森先生はご専門の初期仏教研究に没頭できるように早期退職のご意志を数年前から表明しておられた。今は、先生のご意志を重んじてお送りし、先生の御学恩と学科への御貢献に、本論叢を捧げてささやかながら報いたい。

最後に、われわれ後学へのさらなる御教導を衷心より念願し、先生の御健勝と益々の御精進を祈念しながら、結びとしたい。

平成十九年二月末日

インド哲学科第一部主任

橋本泰元 識